２０〇〇（令和○）年○月○日

〇〇寺門徒

〇〇寺近隣住民　各位

真宗大谷派（東本願寺）〇〇山

〇〇寺代表役員（住職） 〇 〇　〇 〇

　同　責任役員 ○ ○　〇 〇

　同　責任役員 ■ ■　■ ■

　同　総　代 ● ○　● ○

　同　総　代 ● ○　● ○

　同　総　代 ● ○　● ○

**〇〇寺合葬墓建設について（ご依頼）**

謹啓　〇〇の候　みなさまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平素は◯◯寺の教化活動にひとかたならぬご理解とご協力をたまわり厚く御礼申し上げます。

　ここ〇〇寺は、現在、真宗大谷派（京都・東本願寺）（通称・お東）の寺院であり、長きにわたって、御門徒方のご尽力によって護持されてきました。〇〇寺の歴史を紐解けば、この地域の最古の地誌である『〇〇○伝』に「明応６（1497）年、蓮如上人の教化を受けた藤原氏の末裔〇〇が、この地に庵を建立した（取意）」とあります。この時を開基といたしますと、現在に至るまで、520年以上の長きにわたって、ここ■■の地に〇〇寺が存続しまいりました。それはひとえにここに生きる人々と共に、親鸞聖人の教えを学び、守り、聴き抜いてきた先人方の日々の積み重ねであると、住職、責任役員、総代ともども重く受け止めております。

　さて、標題の件でありますが、ここ数年、耳にすることのなかった「墓じまい」という言葉が聞かれてくる中で、〇〇寺の御門徒におかれましても、「墓じまい」を希望される家が増えてまいりました。また、近隣の方々からは、墓や納骨壇は持ちたくないが、何とか納骨できないかというお問い合わせをいただくようになりました。

　少子高齢が進む現代社会において、このような問題は特別なケースではなく、我々一人一人の現実課題として重くのしかかってきております。このような方々に対し、〇〇寺として何かお力になる方途はないものかと、役員一同議論を重ねてまいりました結果、祭祀継承に不安を覚える方々に対してできることは、お寺でそういった方々のお骨をお預かりし、追弔する場を持つことであり、それが、人々へ寄り添うことではないか、との見解で一致し、合葬墓の建立を企図するに至りました。

　いま生きる人々の思いを受け止め、先に亡くなられた方々を常に念じ、仏さまとしてであっていきたいという願いを『仏説阿弥陀経』のお言葉である「倶会一処」（ひとつところでともに出あう）として刻み、手を合わせてまいりたいと願っております。

　つきましては、〇〇寺門徒並びに近隣(特に〇〇寺から半径約110m内)の方々にご理解とご賛同を頂戴したく、ここにお願い申し上げる次第でございます。何卒、趣旨をご理解いただき、ご承諾たまわりますよう重ねてお願い申し上げます。

合　掌

添付資料 〇〇寺　合葬墓　建設概要・合意書 各1部